



Title	理念なき絶対観念論 : F. H. Bradleyの形而上学についての試論 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	白水, 大吾
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第15062号
Issue Date	2022-03-24
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/85439
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Daigo_Shirozu_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 白水大吾

学位論文題名

理念なき絶対観念論

—F. H. Bradley の形而上学についての試論—

・本論文の観点と方法

本論文はイギリスの哲学者 F. H. Bradley (1846~1924) の形而上学についての包括的な研究であり、内容も現実、経験、真理、意志と広範囲に渡る。Bradley は Green らとともに「イギリス観念論」の名の下に、Hegel 哲学のイギリスへの輸入者として理解されることが多いが、本論文は Bradley の形而上学を「理念なき絶対観念論」ととらえ、単なる Hegel 哲学の輸入ではない、その独自性を明らかにしている。本論文のタイトルである「理念なき絶対観念論」が意味しているのは、Bradley は Hegel から強い影響を受けているものの、Bradley の哲学には Hegel が語るような意味での「理念」はなく、日常的な言葉として理解される「理念」もないということである。Bradley の哲学では現実も真理も善も、「ここにあるもの」のうちに見出されているのである。

本論考の特徴は、Bradley 哲学を「理性的な哲学」とする通説的な理解とは異なり、それをむしろ「感性的な哲学」と理解して分析を進めていることである。また本論文は現代哲学・倫理学との関連で進められることの多い近年の Bradley 研究ではほとんど触れられないことのない論文も扱いつつ、Bradley の哲学・倫理学・形而上学をテキストに忠実に理解することを試みている。

・本論文の内容

第一章「現実について」

本章では Bradley の現実概念は理性的だと言えるのか、という問題について二つの観点から考察される。第一に、Bradley は理性的な原理から出発することによって現実についての理解が可能だと考えていたのかどうか、そして第二に、Bradley の現実概念には本質的に発展あるいは過程といった観念が含まれているかどうか、といった観点から考察が進められている。結論として、Bradley の現実概念を理性的なものとして理解するのは適切ではないとされる。

Hegel によれば、この世界は理念の運動であり、理念こそが、最も現実的であるとともに理性的であり、最高の真理である。本章ではこのような Hegel の思想と関連づけて、Bradley 哲学において「現実 is 理性的である」と考えられているかという問いについて扱われる。第一節では、Hegel の思想とそれに対する何人かの思想家たちの反応とが確認され、Bradley にとって現実とは理性的な原理によって内実が知られるものではなく、感性的な原理によってその内容が理解可能になると主張される。第二節では、現実 is 自己目的的に発展するという思想が Green らイギリス観念論者の思想のうちにはみられることが確認された後、そのような思想は Bradley の哲学のうちには含まれていないとされ、Bradley の現実概念は理性的なものではなく、また Bradley 哲学における絶対者は理性的なものではないことも明らかにされる。

第二章「経験について」

第二章では Bradley の「経験」概念が検討される。Bradley の考えによると、感性的経験こそが絶対者であり、直接的な感覚経験のなかでこそ「絶対的な真理」を掴むことができる。第一節では、Bradley の経験概念が、彼の同時代人である T. H. Green, William James, Michael Oakeshott の三人の哲学者たちの経験概念と比較されている。Green の考えでは、世界とは永遠意識が保持している不変の関係からなる体系である。Green は経験を意識と関係との交流として理解するが、Bradley は、経験とは経験だけからなるものであると考える。James も経験は一項からなると考え

る(根本的経験論)が、Bradley は James の根本的経験論では推論的に構成された対象の現実性を説明できないとして James を批判する。また Oakeshott は、経験とは世界が世界それ自体について思考することであるとして直接経験を批判するが、Bradley は直接経験を擁護している。

第二節では、直接経験という概念が Bradley 哲学において果たしている役割について考察される。Bradley によれば、私たちは直接経験とは何か、そしてそこから得られる絶対的な知識とは何なのかをすでに知っている。また思考とは、現実についての絶対的な知識を含む、ある基準に従う運動である。またしばしば Bradley 哲学において「絶対者」として理解されている「超関係的経験」は絶対者として理解すべきではないとされる。さらに経験は経験されるものであって、思考されるものではない、という Bradley の主張の特徴が示される。

第三章「真理について」

真理、思考、判断、推論などを扱う領域は、この 30 年来の Bradley 哲学研究で最も重視されてきた分野の一つである。本章では、「真理とはなにか」という問いについて扱われ、第一節では、判断と推論について説明を加えることによって、Bradley にとって論理学とは推論の一般的規則を考察する学問ではないことが示される。また判断とは、一つの観念を現実へと参照することであり、判断は必ず条件的であるとされる。また推論は観念の自己発展であるとされる。

第二節では真理に関連する議論が取り上げられる。真理とは判断の条件を充足することである。ここでは現代哲学における様々な真理論と Bradley の真理観とが比較され、Bradley の思想は、対応説、同一説のいずれとも同一視できず、また斉合性が真理の基準だとされてはいるものの、斉合説でもないことが示される。また観念は現実と切り離されてはおらず、思考は自分自身を、より大きくより整合的な体系として作り上げようとするが、これが「考える」という過程である。そして、真理とはこの「考える過程」のことであり、判断の条件を満たすとは考えることに他ならない。また私たちは決して完全な真理には到達できないことが示される。

第四章「意志について」

本章では、自己実現の概念を中心に Bradley の倫理学思想が論じられる。Bradley は倫理学の分野では、「Why be moral 問題」を提起したことで知られている。この問いは、道徳性が何かを目的として持っていることを前提しているが、道徳性が他の何かを目的として持つということは考えられず、Bradley はこの問いは、「道徳性はそれ自体目的であるか」という問いと同じであるとする。そして、Bradley は「目的それ自体に対する、あるいは実践的な「なぜ」に対する、最も一般的な表現」とは「自己実現」であるとする。Bradley の自己実現という概念に関しては、第一に、どのような自己を実現することが道徳的であるかという問いがあり、第二に、そもそも自己を実現するとはどういうことか、という問いがある。第一節では『倫理学』という著作をもとに前者の問題について、第二節では「意志の定義について」をもとに後者の問題について議論される。

Green の倫理学における自己実現とは永遠意識の実現のことであるが、Bradley にとって自己実現とは私の意志の実現である。また Green 倫理学は実践的なものであり、Green は私たちは良心に従うべきであると考えた。また Hegel の「教養」概念は規範的・実践的な含意を持つとされる。一方 Bradley は、哲学の仕事は現実において何を為すべきかを教えることではなく、現実を理解することだと考えている。私たちはすでに道徳的な存在であり、素朴な道徳的意識において道徳性を直接的に把握している。

第二節では、意志の本性について論じられる。Bradley によれば、意志とは観念が自己を実現させることであるが、私たちは、この発展し実現される観念と私たち自身を同一視する。思考における場合と同様、観念が発展して自己を実現する過程は観念の自発的かつ必然的な働きである。Bradley の道徳についての見解は、意志の働き、すなわち観念の自発的な発展とその実現という思想に裏づけられており、それは思考と同様に現実の働きであり、私たちの道徳性は現実によって直接的に支えられている。倫理学の領域においても、Bradley の思想は現実に対する全面的な信頼に貫かれている。